

# 本文章已註冊DOI數位物件識別碼

## ▶ 『平家物語』と諸行無常

doi:10.29714/TKJJ.200106.0002

淡江日本論叢, (10), 2001

作者/Author： 陳伯陶

頁數/Page： 29-50

出版日期/Publication Date：2001/06

引用本篇文獻時，請提供DOI資訊，並透過DOI永久網址取得最正確的書目資訊。

To cite this Article, please include the DOI name in your reference data.

請使用本篇文獻DOI永久網址進行連結:

To link to this Article:

<http://dx.doi.org/10.29714/TKJJ.200106.0002>



DOI Enhanced

DOI是數位物件識別碼（Digital Object Identifier, DOI）的簡稱，是這篇文章在網路上的唯一識別碼，用於永久連結及引用該篇文章。

若想得知更多DOI使用資訊，

請參考 <http://doi.airiti.com>

For more information,

Please see: <http://doi.airiti.com>

請往下捲動至下一頁，開始閱讀本篇文獻

PLEASE SCROLL DOWN FOR ARTICLE



## 『平家物語』と諸行無常

淡江大学教授

陳 伯 陶

### 【論文要旨】

『平家物語』の原本は、承久年間から仁治年間（1219～1243 年）に書かれた平家一門の栄華とその没落・滅亡を描いたもので、仏教の因果観・無常観を基調とした和漢混淆文で、更に対比の手法を交えた散文体の叙述詩である。当初書かれた『平家物語』には読み本と語り本があり、語り本の方は琵琶法師によって幾層にも加筆され、それが語りによって一般大衆に歓迎され、延々と今日に至っている。これは恰も中国の『三国志通俗演義』が『三国志演義』、更にただの『三国志』へと変遷を重ね、この歴史の語り本は民衆の喝采を浴びた。それが正式の読み本になったのは明の羅貫中に手によるものである。語り本の性格としては、どうしても善玉・悪玉が必要であり、悪玉の曹操（魏）が勝てば民衆は涙し、善玉の劉備（蜀）が勝利を収めると大衆は拍手するこのパターンは、昔から今に至るまで変わらない。歴史的見地から見るに、『三国志』にしる『平家物語』にしる、これを正統論として客観的に史実を叙述するのか、あるいはこれを道德論として歴史を解釈するかによって、善玉・悪玉は変わる。

本論では歴史的視点からこの文学書（戦記物語）を解釈し、正統論によって書かれた『平家物語』を再考すものである。

本文では、先ず『平家物語』が今でも不朽の名著として一般大衆に好まれている原因を述べ、次いで『平家物語』が正統論の根拠とする王法・仏法の衰微が平家一族によってもたらされたというその矛盾を衝き、更に悪玉であった平家一族の罪業を、作者は対比の手法を使ってそれを一層増幅することによって筆誅し、最後にこの『平家物語』を単に戦記物語として解説するのではなく、その中に因果論に潜む肉親・親子・夫婦、そしていつの世でも戦乱に泣く女性の秘話・哀話を述べることによって、『平家物語』がいつまでも大衆の心琴を揺さぶってやまないその根源を指摘し、一般の「勝てば官軍」式の歴史書として『平家物語』を読むのとは別の視点から、これを道德論として解説することも一つの読み方ではないかと愚見を述べたものである。

キーワード：諸行無常、因果応報、王法、仏法、正統論、道德論。

## 一、始めに

『平家物語』は、今日に至るまで長い年月にわたって人々に親しまれてきた。ところで人々が『平家物語』に接するのは、必ずしも古典としての『平家物語』を読むという方法のみによってではない。古典が平易化され、通俗化された読み物とか、古典を素材として脚色した小説、演劇の類を媒介としての『平家物語』との接触が少なくないし、その接し方も、見る、聞く、読むなどさまざまであり、またそれらが『平家物語』を典拠としているという自覚を持たない場合さえある。むしろ古典『平家物語』を読むことによって、始めて『平家物語』に接する人は稀であり、古典の全篇を通読する人もさほど多くはない。

周知のとおり、『平家物語』には読み本としての版本と語り本としての版本がある。この語りの『平家物語』では、盲目の琵琶法師によって語り継がれたいわゆる「平曲」と言われる調べが、延々と今日にまで伝わっている事実からも、容易に『平家物語』と接するには、必ずしも高度の知識・教養・鑑賞能力等を必要としなかったし、またそこに、『平家物語』が大衆に受容された一因が存在するのである。

さて『平家物語』が今日まで受容されてきた要因は、すなわち『平家物語』がただ単に軍記物語だけではなく、そこには血肉の愛、男女の愛、女性の悲話、更に滅びに伴う悲哀が包含された実にダイナミックな古典であった。その内容は、天承元年（1131）に平清盛の父忠盛が、鳥羽院の御願寺長寿院を造進した功績により昇殿を許された時のエピソードを描いた「殿上闇討」（巻一）にはじまり、建久十年（1199）に清盛の曾孫六代が処刑されて平家の子孫が絶滅するという終章の「六代被斬」（維盛の子、巻十二）まで、五世代約七十年におよぶ平家一門の興亡の過程がその対象とされ、その前後に「祇園精舎」と「灌頂巻」を対比させ、それによって平家の罪業と贖罪の証しとを殊更に増幅した。しかし、我々が日本の歴史を読むにつけ、これらの諸事実は一人平家が独占するものではなく、そこには諸行無常とでも言うべき因果論が存在していることを容易に見いだすことができる。例えば平家一族の滅亡を象徴する「六代被斬」にしても、これは一人平家に限ったものではなく、当時の勝利者である源氏も五十歩百歩であった。平家滅亡の建久十年には、すでに同じ源氏の本曾義仲が殺され、源義経も、更に範頼も兄頼朝に殺されている。しかも全『平家物語』を通しての主没後白河法皇も崩御している。そして平家の後を継いだ源氏の鎌倉幕府にしても、せいぜい三代の実朝までで、二代・三代とも外戚北条氏に殺されており、鎌倉幕府は実朝以降は「名存実亡」の憂き目にあう。奢れるもの、猛きもの

の滅びることを主題とした『平家物語』も、実は源氏にも当てはまるのではないかと思う。平家が二十数年の栄華を極めて滅びたのに対して、源氏も三代実朝までが二十数年であり、この奇しき運命のいたずらは、修因感果とても言うべき歴史の繰り返しではなかろうか。したがって、本小論文では、『平家物語』が平家の滅亡を描くに際しての基本概念である「王法・仏法」の護持を当時の実情から解析すると共に、平家物語を通して終始変わらぬ平家の罪業をこれでもか、これでもかと暴く筆法、特に対比法を駆使したその平家に対する筆誅を述べ、またこの悲哀・滅びを前提とした『平家物語』における肉親に対する悲話・哀傷を挙げ、それが故に『平家物語』は今日まで延々と続き、琵琶法師が語る平曲の調べに聴衆の心琴を揺るがし、涙するその源に接するのが眼目である。そして最後にこの『平家物語』が言おうとするものは、王法・仏法の擁護ではなく、そこには人間社会に厳然と存在する「諸行無常」の条理であることを述べるものである。

『平家物語』は前述したように、大別して「語り物系」と「読み物系」の二種に別れ、前者は更に「八坂流」と「一方流」の二つに分けられる。「八坂流」は十二巻、「灌頂の巻」を特立せず、「一方流」はそれを特立して十三巻となっている。そして平曲としての「八坂流」は途中で滅び、現在わずかに残っているのは一方流のみである。「屋代本」や「中院本」は八坂流で、「寛一本」や「同別本」は一方流の諸本である。これに対して「長門本」（二十巻）や「延慶本」（六巻十二冊）、『源平盛衰記』（四十八巻）は読み物系とみなされている（注1）。かように『平家物語』の版本が多く、取捨に困惑するので一応斯界の権威を持つといわれる岩波書店昭和34年出版の日本文学大系『平家物語』をテキストとして用いた（十二巻の他に灌頂巻を付している）。この『平家物語』では、前の六巻は平家の罪業を数え上げ、それが故に平家が滅亡したことを力説し、後半の六巻では源平の合戦をつぶさに描き、その中で諸々のエピソードを盛り込んで、最後に建礼門院の六道談議並びに天国に上ることで締めくくっている。

## 二、王法・仏法の衰微と『平家物語』

### 1、源平交替史と王朝・仏法の護持

古代における善悪の基準は朝廷への順逆であり、この因果論に裏打ちされた『平家物語』においては、富士川や礪波山での源氏の大勝利、平家の不可解な大敗が全巻を通して延々と語られてゆく。そして源平合戦の最終的な勝利者は、言うまでもなく源頼朝であるが、頼朝の勝利というものも、決して単なる武力によるものではなかった。それは善因善果の

理法に基づく勝利であったと『平家物語』は主張したかったのである。

平家物語諸本のなかでも最古本とされる延慶本では、その第六末の末尾に「右大将源頼朝の果報、目出たき事」という章を立て、平家を滅ぼした頼朝の「果報」を次のように述べている。

そもそも、征夷大將軍前右大将(頼朝)、すべて目出たかりける人なり。……仏法を興し、王法を継ぎ、一族のおごれるをしずめ、万民の愁ひをなだめ、不忠の者を退け、奉公の者を賞し、あへて親疎をわかず、まったく遠近をへだてず、ゆゆしかりし事どもなり(注2)。

ここで特に頼朝の果報について述べる際にも、平家の、特に平清盛の奢れ、猛けき様を取り出し、それが王法、仏法の衰微を来したから敗戦の憂き目にあった、いわゆる因果応報を述べ、頼朝を正義の味方として扱っている。確かに平安京の北の鬼門に位置する延暦寺を焼きはらい、更に後白河法皇をも幽閉せんとした平家の横暴は存在した。それこそ清盛の義兄(妻時子の兄)平時忠が言うように、「平家にあらざれば人は皆、人非人なるべし」

(巻一「禿髪」)と豪語したように、頂点に達した平家の繁栄とその奢れる様は、人々の輦轡を買うに値するものであった。当時平家一族の栄華は

惣じて一門の公卿十六人、伝上人三十余人、諸国の受領、衛府、諸司六十余人なり。世には又人なくぞみえられける(巻一「吾身栄花」)。

平家はその悪行故に自滅する以上、平家に勝利する頼朝は、王朝の秩序を回復させた「目出たかりける」人物であった。その目出たい行いの果報として、頼朝は「天下の大將軍」であって、決して平家の政治的覇権の継承者ではない、というのが平家物語の言いぐさであった。だが事実から見ると、頼朝の鎌倉幕府は(建前はともかく)決して朝廷の御守り」として存在したのではなかった。逆に鎌倉にその後数百年揺るぎない武家政権を作る基礎を与え、その後の武家政治による朝廷無視の歴史を作る元となった。これらは当初後白河法皇の意に反した結果であり、後白河法皇も平家の覇権を剥奪し、元の朝廷主導の政権確立を目指した当初の意図が裏目に出たこととほぞをかんだことであろう。

頼朝が「日本国の惣追捕使」として全国の兵糧料を徴収したこと、それが「過分」の行いであったことは、平家物語にも語られている(巻十二「大納言の沙汰」)。租税(兵糧料)の徴収権と、全国の警察権を手に入れた頼朝の平家物語の中で言われる「果報」は、朝廷の出先機関としての征夷大將軍の職分を明らかに逸脱するもので、後白河法皇の予想だになかったことであり、さらに守護・地頭という私設の官の任免権を持ち、全国の所領争奪のもっとも強力な調停機関となった頼朝の幕府は、それまでの権門国家の枠組みを越えて、

朝廷から独立した国家内国家といった様相を呈した。

頼朝は清盛の政治的覇権の継承者どころか、その政権基盤の確かさにおいては、遠く平家の半貴族的政権の遠く及ばない武家政権であった。にもかかわらず平家物語は、そのような頼朝を王朝の秩序回復と位置付けている。おそらくこの辺に、平家物語に構想された「歴史」の位相がかいまみえるのではないかと思う。

鎌倉の武家政権という現実と対処させる形で、中世の因果論あるいは修因感果、さらには因果応報といった思想がその根底にあったのではないかと思う。おそらく作者のねらいは、内乱期の現実をどこまでリアルに叙述するか、などというものではなく、乱後の現実からさかのぼって、その起源となった治承・寿永の「歴史」（源平両氏を「朝家の御守り」とする）を再構築することで、その延長線上に、どのような現実が導かれるのかを構想し、それを文字にしたのではないかと思う。それが問題である。もちろん上述したように、頼朝を王朝の秩序回復者とする平家物語の立場は、その後の「歴史」において、源氏がともかく王法・仏法体制の論理的整合者としての働きを期待する意味も含まれていたのではないかと思う。すなわち、鎌倉の武家政権を王朝国家の枠内へ論理的に位置付けられるという構想である。

特に平家の嫡流を滅ぼし、更に武家そのものの討伐を企てた後鳥羽院とは、平家物語においては悪玉にほかならない。「朝家にめしつかはれ」る源平両氏が拮抗して「代の乱れ」を正すというのが、作者のイメージした秩序世界である。悪玉の後鳥羽院は、結局承久の乱に破れて讃岐に流される（『平家物語』はそれを讃岐で非業死した文覚の怨霊が院を迎え取ったとしている）（注3）。武家の討伐を企てた後鳥羽院の悪政とは、慈円の『愚管抄』が言外に指摘するところでもあった（注4）。

平家物語において、武家政権を王朝秩序に組み入れる構想は、現実の政治史の中ではなくずし的に無効化されてゆく。王朝の政治秩序を価値基準とした源平盛衰の「歴史」は、その後の歴史に延々と引き継がれ、明治の新政府によってはじめて終止符を打つに至るのである。例えば頼朝の死後に幕府の実権を握った北条氏は、桓武平氏（貞盛流）を自称している（注5）。その系譜の信憑性はともかく、源氏三代將軍実朝を滅ぼした北条氏が桓武平氏と称したことで、平家物語の「歴史」は以後の現実の推移に引き継がれることとなる。

すなわち、鎌倉末期に起こった反北条氏（反平家）の全国的な内乱が、あれほど急速に新田と足利（ともに源氏嫡流家）の傘下に糾合されたこと、また北条氏滅亡の後、内乱が直ちに新田・足利の覇権抗争へと移行した事実を見ても、源平交代の物語りがいかに武士

たちの動向を左右していたかが伺える。

平家物語の圧倒的な享受を流布・浸透してゆく源平交代の物語とは、現実の武家政権を王朝の政治秩序に組み入れる論理であり、それは王朝国家が武家政権に対抗して最終的に構想した神話であるが、それが十分に神話的様相を呈した歴史の様相は、足利将軍が十五代で滅び、武家政権の継承者となった織田信長が桓武平氏を自称したことを見てもよい。

清盛と同じように円暦寺を焼きはらった後の信長でさえ、みずからの政権基盤を「朝家の御守り」と自己規定している。さらに足利氏（源氏）・織田氏（平家）の後を継いだ徳川家康も清和源氏を自称する。換言すれば、『平家物語』が示唆するものは、平家（平清盛）の後に源氏（頼朝）、そして平家（北条）、源氏（足利）、平家（織田）、源氏（徳川）という図式で源平両族による相互の政権争奪に終始した日本の歴史であった。しかもそれらが異口同音に「朝家の御守り」をスローガンに置いている点に注目したい。天皇の信任を受けた源平の「武臣」の交替史であるべきものが、このような「源平両族の末裔」による権力抗争は、その名も「征夷大將軍」という朝廷からもらった官位を埒外に置き、天皇家は冷や飯を食うはめに陥るのが日本の中・近世史の姿であった。

## 2、仏法の復興

『平家物語』には第一巻の「祇園精舎」「祇王」から六巻までで、平家一門の栄華、おごりに直接関連づけられて書かれており、それが因となって七巻以後の平家滅亡へと引き継がれる。まず第一巻の「額打ち論」では、永萬元年（1165）秋に崩御した二条天皇の葬儀に際して、延暦寺と興福寺が、葬所の額打ち（墓所の周囲に寺院名を記した額を懸げること）の序列をめぐる争ったことが語られる。両寺の確執は、延暦寺の僧兵が興福寺の末寺、清水寺を焼き打ちするという事態を引き起こす（巻一「清水寺炎上」）。

桓武天皇の代に創建された清水寺は、王城鎮護の道場として、桓武・嵯峨両帝の御願寺とされた寺院である。その清水寺が僧徒の抗争によって焼失する。この時点において、王法を守護すべき仏法は、すでにその内部が荒廃していた。

そして続く「東宮立ち」（巻一）では、六条天皇（二条天皇の皇子）の皇太子として、後白河上皇の皇子、憲仁親王（後の高倉天皇）が立坊したことが語られる。三歳の天皇に対して、その叔父にあたる六歳の親王が皇太子になったことは、「昭穆のあひかなはず」「長幼の序にかなわない」（巻一「東宮立ち」）と評され、同じ巻一の「殿下乗合」でも六条天皇の急逝に即位した高倉天皇は、その生母建春門院滋子（平清盛の妻時子の妹）で、新帝の即位は、「いよいよ平家の栄花とぞみえし」（巻一「東宮立ち」）として「平家の悪行のは

じめ」とされる「殿下の乗合」事件でも語り継がれる。これは平家のおごりよりも、むしろ後白河法皇の近臣達が企てた平家討伐の謀議で、平家の「悪行」というより、法皇の近臣たちのおごれる様が強調されていると見る方が妥当ではなかろうか。

「内裏炎上」(巻一)で、平安京の造営以来、大極殿は数度の火災にもかかわらず再建されてきた。しかし「今は末世になって、国の力も衰へ」(「内裏炎上」)たため、大極殿はついに再建されることはなかった。これは王朝の終末を予期させる象徴的な事件であった。

『平家物語』の巻一で平家一門のおごりや悪行と共に、むしろそれ以上に、仏法・王法ともに衰微する末世の世相を語っている。それは巻二にも受け継がれる。巻二冒頭の「座主流し」では、天台宗座主の明雲が「御輿振り」事件の責任を問われて流罪に処せられる。これは院の近臣がしくんだ策謀によるが、続く鹿ヶ谷の陰謀発覚にともなう首謀者として、座主流罪をしくんだ院の近臣(王法の担い手)にくだる仏法の冥罰である。

鹿ヶ谷事件が一段落ついた巻二の後半では、延暦寺の学生(学問・修行につとめる正規の僧侶)と堂衆(寺院内で雑役に奉仕する下級の僧徒)の抗争による比叡山の荒廃が語られる。平家物語はそれを、

さしもやんごとなかりつる天台の仏法も、治承の今におよんで滅びはてぬるや。心ある人、なげき悲しまずといふことなし。(第二巻「山門の滅亡」)

と述べている。「帝都の鬼門に峙ちて、護国の靈地」(巻二「座主流し」)と言われた延暦寺がまさに「滅びはて」ようとしている。

こうした「山門の滅亡」に続けて、信濃の善光寺が炎上する。善光寺は日本に渡来した最初の仏像(阿弥陀三尊像)を祭る寺として尊崇された一大地方寺院である。その善光寺が創建以来はじめて炎上したという知らせは、まさに仏法・王法がともに衰亡する凶兆であった。

王法つきんとては、仏法まづ亡ず」といへり。さしもやんごとなかりつる靈寺・靈社の多くは滅びうせぬるは、王法の末になりぬる先表やらん、とぞ人もうしける。(巻二「善光寺炎上」)

世はまさに末法の世であり、王法を守護すべき仏法が「滅びうせ」ようとしている。

ここまでの『平家物語』における仏法の衰微は、まず朝廷の企てと仏寺自体の腐敗にほかならない。換言すれば、仏法は滅ぶべきして滅んだということである。これを強引に平家一門のせいにするのはお門違いも甚だしいと言わねばならない。かように、王朝国家を崩壊へ導いたのが、平家一門のおごりや悪行であるという論理は、納得の行かないもので



あり、百歩引いてそれが「平家の悪行」によって加速されたとしても、まず末法故の仏法・王法の衰微という事実重点を置き、そのような終末的状況が物語世界の前提としてある以上、秩序への順逆（善悪）を説明原理とした因果応報（因果論）もその前提からして成り立たないということである。

要は、平家滅亡の原因を王法・仏法の軽視・破壊に因を置き、そしてそれが因果応報の結果として平家は滅ぶべきして滅んだという説法で貫かれた『平家物語』は、それを単なる文学作品として読む場合はそれも良いが、歴史書としては余りにも作者の主観が大き過ぎるというものである。それというのも、作者が『平家物語』を著述するに際して、当時の政治体制に鑑み、作者の望む国家体制の樹立を基調としての構築あるいは構想であったと考えるなら納得がいこうと言うものだ。更に「諸行無常」は人間社会の誰もが逃れることのできない宿命であり、それは天皇にしろ、幕府の将軍にしろ、はたまた普通の一般庶民にしろ、逃れることのできない人間のしがらみである。

### 三、対比法に増幅された平家一門の罪業

一般に修辞学でいうところの対比法には二種類ある。一つは文字表現上の対比で、もう一つは内容の対比である。

まず文字表現上における対比を『平家物語』全篇から見ると、いたるところに対比を使った修辞が散在する。まずその例を著名な第一巻冒頭の「祇園精舎」から見る。

祇園精舎の鐘の声、諸行無常の響きあり。

沙羅双樹の花の色、盛者必衰の理をあらわす。

おごれる人も久しからず、ただ春の夜の夢のごとし。

たけき者もつるには滅びぬ、ひとへに風の前の塵に同じ。

この見事な七五調の前後二句の対比の描写は見事である。そこには「諸行無常」「盛者必衰」などの仏教語彙が、その詠嘆口調とともに強く印象づけられて対比されている。かような対比は至るところに散在し、最後の灌頂巻の「西に紫雲たなびき、異香室にみち、音楽そらにきこゆ」（灌頂巻）で建礼門院が極楽浄土への昇天を意味したくざりと、清盛の「あっち死に」（体中が熱くて悶え死ぬ）に見られる「屍はしばしやすらひて、浜の真砂にたはぶれつつ、むなしき土とぞなり給ふ。」（巻六「入道死去」）との対比は、いわゆる建礼門院の六道輪廻を経た後の極楽昇天と対比して、清盛の罪業の深さ故の地獄行きを述べ、前後に対比の妙味を十分に現した文章表現である。もちろん、この小論では文章の対比に触れる

つもりはないので、この部分は割愛し、本小論文は『平家物語』を歴史的に読むという主旨に基づいて論旨を展開するものであるので、主に内容の対比について平家一門の罪業の増幅を主眼に述べるものである。

#### 1、まず清盛について内容の対比した部分について述べる。

第一巻「祇園精舎」の冒頭の部分で上記二つの修辞の対比文を並べ、しきりに清盛の罪業はおごれ、たけきがためについにほろぶその修因感果の結末を作り上げたのだということとを述べ、続いてそれを本朝・異朝に例を挙げて対比している。

遠く異朝をとらぶらへば、秦の趙高、漢の王莽、梁の朱、唐の祿山、是等は皆旧主先皇の政にもしたがはず、楽しみをきはめ、諫めをもおもひいれず、天下の乱れむ事をさとらずして、民間の愁ふる所を知らざっしかば、久しからずして、亡じにし者どもなり。

近く本朝をうかがふに、承平の将門、天慶の純友、康和の義親、平治の信頼、此等はおごれる心もたけき事も、皆とりどりにこそありしかども、………（巻一「祇園精舎」）

中国秦の趙高以下の異朝の先例は、「旧主先皇の政にもしたがはず」、天下を乱したことにおいて「おごれる」「たけき」者たちであるという。

つづく本朝の平将門、藤原純友、藤原信頼は、時の朝廷に敵対してほろんだ「朝敵」の先例である。いずれもこの後、巻五「朝敵揃へ」で、野心をさしはさんで「朝威を滅ぼさんとした」（巻五「朝敵揃へ」）「朝敵」の先例として更に多くの本朝・異朝の例を挙げている。そしてこのような「おごれる」「心もたけき事も、皆とりどり」であった異朝・本朝の先例の中でも、とりわけその言語に絶する存在として、清盛が紹介される。

まちかくは、六波羅の入道、前太政大臣朝臣清盛公と申しし人のありさま、伝へ承るこそ、心も詞も及ばれぬ。（巻一「祇園精舎」）

しかし此处で問題とすべきは、日本の朝敵の例を挙げる分には別に異存はないが、中国の例は確かに不適當である。趙高の反した秦の始皇帝は独裁政治の悪玉であり、根本的に日本と史観を異にする中国の例を挙げる事には異を唱えざるを得ない。もともと、中国は日本と違って、いわゆる万世一系の天皇があるわけではなく、そこにある歴代の皇帝の移り変りはいわゆる「易姓革命」であり、民の好まざる為政者にはこれは滅ぼされて当然だという歴史観があった。これがいわゆる孟子の「民為貴、君為輕」という思想である。『平家物語』ではこの冒頭の文章の中で、本朝・異朝の例を挙げて清盛の悪行を増幅させようとする筆法は、要するに最初から清盛を悪者として扱ったことである。

そして更に清盛罪業の最たるものとして、第五巻の「大庭早馬」で頼朝の挙兵が報じら

れ、続く「朝敵揃へ」では、神武天皇の治世以来の歴代の「朝敵」の先例が再度列举される。すなわち、

わが朝に朝敵のはじめを尋ねれば、日本磐余尊（神武天皇）の御宇四年紀州名草の郡、高雄村に一つの蜘蛛あり。身みじかく、足手ながくて、力人にすぐれたり。人民を多く損害せしかば、官軍発向して、宣旨をよみかけ、葛の網をむすんで、つみにこれを覆ひ殺す。それよりこのかた、野心をさしはさんで朝威をほろぼさんとする輩、大石山丸、大山王子、守屋大臣、山田石川、曾我人鹿、大友真島、文屋宮田、橘逸成、氷上川継、伊予親王、太宰少弐藤原広嗣、惠美推勝、早良太子、井上皇后、藤原仲成、平将門、藤原純友、安部貞任、宗任、対馬守源義親、悪左府（頼長）にいたるまで、すべて二十四人、されども一人として素懷をとぐる者なし。かばねを山野にさらし、かうべを獄門にかけらる。（巻五「朝敵揃へ」）

と述べている。「朝威を滅ぼさんとする輩」が「されども一人として素懷をとぐる者な」く滅んだ「朝敵」必滅の先例は、王朝の歴史を叙述する側の堂々たる口ぶりには違いないが、しかし此处では、こうした歴代の「朝敵」の系譜上に、内乱の勝者、頼朝が位置付けられている事は、何と言っても腑に落ちないものを感じる。

そして「朝敵揃へ」に続く「咸陽宮」では再度異朝の先例として、燕の太子丹の話が語られる。秦の始皇帝の殺害によって捕らわれていた燕の皇太子丹が、帰国を許されたのを機に、勇士をかたらって始皇帝の殺害を企てる。しかし一人の後の機転で難を逃れた始皇帝は、逆に燕に大軍をつかわして太子丹を滅ぼしてしまう。

始皇帝の殺害を企てた燕丹が「素懷をとぐる」ことなく滅んだ異朝の先例として述べている。巻五の「朝敵揃へ」の本朝の先例、「咸陽宮」の異朝の先例と、巻一の「祇園精舎」の本朝・異朝の先例とが相互に対応するのであるが、しかし「咸陽宮」では、国王の殺害を企てた燕丹の孝心と、彼に協力した勇士たちの道義心が中国では極めて同情的に語られている。しかも殺されかけた国王とは、希代の暴君秦の始皇帝である。この話の「反逆イクオール悪行」という論理は成り立たない。ましてや史実からも分かるように、これら本朝・異朝の例をもって源頼朝を王朝への正当的な系譜上に位置付ける事によって、名分のレベルにまで昇華させるという構想自体に問題が残されていると思う。

戦乱の時局を収束へと動き出し、勝利を得たのが平家一門である。悪者は単に武家の一権門としての平家だけではない。当時の王朝の歴史的持続と、それを支える畿内中央の時空そのものが崩壊しつつある事が重要であって、つまり王法・仏法理念で秩序づけられる

こちら側の世界が地崩れ的に崩壊しつつある事だけを重視し、いかにしてそのような末世・戦乱の世を元に戻すかに力を注ぐのが世のならいで、別に「朝敵」蜂起を述べることから、それによって清盛の罪業を加速させ、更に頼朝の正当性を見いだすのは、姑息と言うものではないだろうか。

それというのも、古代から中世へ、貴族の時代から武家の時代へ、十二世紀は日本の歴史の大きな転換期であった。それはまさに激動の時代の幕開きであった。「祇園精舎の鐘の声、諸行無常の響きあり」に始まる『平家物語』は、仏教思想や因果応報観を基本的な世界観として、源平の争乱というその時代の壮大なドラマを歴史の現実 に即しながら客観的に物語ろうとした叙述詩的な作品である。そこでは、平家一門の運命の推移を縦糸に、平氏を滅亡の淵に追い込んだ源氏の武将たちのさまざまな姿を横糸にして、それらの織りなす対立・葛藤がリアルな目で凝視され、歴史的な時間の進行の枠組みの中で捕らえるきである。

## 2、清盛と重盛の対比

『平家物語』の主役は何としても清盛である。そして彼を王法・仏法に対する悪行との関連において捉えているが、その悪行の増大過程の中で、極めて鮮明な形象性を示し、彼本来の強烈な、しかも豊かな個性を伺わせる場面として「鹿の谷事件」が挙げられる。鹿の谷事件は後白河法皇を中心とする反平氏グループ、新大納言藤原成親・西光法師・平判官康頼・俊寛らの平氏討滅の陰謀が発覚したのに端を発するもので、『平家物語』は事件発覚の当初から清盛を物語の中心に置き、事件の展開過程を語ることになる。そこでは清盛の豊かな個性と嫡子重盛との関係が浮上し、重盛との対比が描かれている。

清盛と重盛との対比を見ると、それは完全に人間の内面にかかわる倫理的、人格的な意味での対立関係であって、いわゆる力の関係ではない。すなわち両者の対比は、まったく異質の個性の触れ合いであると考えられる。清盛との対比において、重盛の温厚な人柄や理性的性格、殊に王法・仏法の遵守者としての貴族的なあり方が強調されればされるだけ、清盛の傲慢不遜な人物、激情的野生的な性格の持ち主として、王法・仏法に対する反逆者の姿を際立たせる結果をかもし出す。重盛は伝統的な貴族的思想の代弁者として清盛の言動を批判し、又悪行の掣肘者として働くことにより、平家の没落の運命を支える役割を担って登場する。したがって重盛と対照的な清盛の性格から来た悪行が平氏滅亡の主因とされたのは確かである。とすれば、その両者の構想上の役割が、それぞれの人物の持ち味や特色を相互に際立たせる結果は、要するに清盛と重盛の対比が一層その密接な関連性を浮

き彫りにさせる効果を生んでいる。それはあたかも創業者第一代の社長とその後を継いだ二世社長、又例を歴史に取れば、徳川家康と三代将軍家光のようなものではなかろうか。

### 3、西光と清盛との対比

次に西光との関係における清盛の対比で、清盛像はどうなっているのかを見る。西光は『平家物語』の中で大きく扱われている人物とは決して言えない。しかし、豪胆な性格を持つ院方の切れ者として極めて個性的な姿を現すといってもよい。したがって、清盛と西光との対決場面は、清盛像を考察する場合見落とせないところである。「緑のきはにひきせさせ、物はきながらしゃつたらをむずむずと」（巻二「西光被斬」）踏むというような激しい態度で臨む清盛に対してさえ、西光はまったくたじろぐことはなかった。逆に西光本来の豪胆性を遺憾なく発揮して、清正に激しく抵抗する姿勢を示す。「殿上のまじはりをだにきはれし人の子で、太政大臣まで成あがったるやかぶんならん」（巻二「西光被斬」）とその成り上がり者性を厳しく突く言説が、直接清盛に対して向けられた例は『平家物語』ではほとんど他に類を見ない。このような西光に対する清盛の怒りは、いやましに増大せざるを得ない。「いやつが頸左右なうきるな。よくよくいましめよ」（巻二「西光被斬」）とか、「しやつが口をさけ」（同）とを命じ、厳しく処断する清盛の姿に敵対者は徹底的に圧倒しなければやまない強大な意志と激越な性格とがうかがわれる。要するに、西光との関係においては、敵対者西光の豪胆な性格や激しい抵抗の姿勢によって清盛の躍動的な姿が生き生きと印象づけられる結果となる。両者の関係あるいは対比は、完全に強者対強者の力関係の様相を呈するから、これは重盛とは意趣を異にするもので、強者と強者の対立・葛藤の過程を通じて清盛の強者性が顕示される場面であると言えよう。これは先にも述べたように、時代はまさに古代から中世、そして貴族政治から武家政治への移行期に当たり、両者の時代に対する認識と自己の取得した権利の行使にほかならない。

### 4、成親と清盛の対比

西光とは対照的なのが成親の場合である。成親は狂氣的とも言える執着ぶりで官位官職の栄達を望んだが、全盛時代の平氏一門におされてその望みがかなえられず、ついに平家打倒を企て、その張本人として鹿の谷で謀議をめぐらす。ところが、その実行の前に多田蔵人行綱の密告によって事が露頭し、たちまち清盛によって逮捕され、厳しい追及を受ける身となる。この成親が清盛と対面する場面は西光とは対照的であった。しかし、両者の対面する場面を見ると、成親側からは、何らの抵抗もないので、清盛の激しい怒りや強大な意志は一方的に成親に貫通しているのを認めないわけにはいかない。ここでは、ひたす

ら恐懼してやまない脆弱な成親の姿との対比において、清盛の個性的な姿は生彩を放つといってもよいであろう。したがって、成親のその後の衰運が急速であり、没落の有様が悲惨であればあるだけ、それは清盛の強硬な態度や強烈な個性に跳ね返る結果となる。巻二の「真納言被流」や「大納言死去」にみられる成親の没落過程は、成親説話として清盛像からは独立する傾向を示しているが、両者が直接対面する場面を前提とするなら、右の二章段は当然清盛像との関連で捉えるべきである。このように考えると、両者の関係は強対弱、強者に対する弱者の関係であり、強者が弱者を完膚なきまでに圧倒し去る過程に強者清盛の強者たる面目が躍如として現れたと言えよう。これはちょうど西光の場合（西光も同じように鹿の谷事件に参加している）とは対照的である。

そのほか平家ではないが、源氏側として木曾義仲の最後の場面において、今井四郎とたった二人きりになり、栗津に追いつめられた時、両者の死に対する対比（義仲は勇敢に敵中に突進し、敵の矢に内甲を射抜かれてあえなき最期を遂げたのに対して、今井四郎の「是を見給え、東国の殿原、日本一の甲の者の自害する手本」といって大刀の先を口に含み、馬より逆さまに飛び落ち、貫いて死んだ）（巻九「木曾最期」）、更に義経と頼朝の対比は『平家物語』の後半に出てくる戦譚の最たる者であろう。

#### 四、因果論に潜む肉親・女性の悲話・哀傷

『平家物語』は単なる軍記物語ではない。その中に清盛一族のおごりやたけき姿が描かれており、更にそれが故に滅びの結末が待ち受け、後半では源氏との合戦において幾多の平家の人々の諸々の肉親の愛、更に男女の愛、女性の悲しみが描かれており、それを琵琶法師が琵琶の伴奏に乗って哀感こもる語りの名作として今日まで続いている。これが『平家物語』であり、他の『源平盛衰記』などの読み本、あるいは戦記物語と違うところである。そこでここでは『平家物語』において、後半部分に見られる平家滅亡の過程における平家一族の哀愁に満ち、人心を引き付けて離さない肉親・女性の悲話を述べてみたいものである。換言すれば、これを見落としては『平家物語』を読んだことにはならないと考える。

権勢をめぐる抗争を中心として、歴史を大きく転換させていった事件を主軸に語る『平家物語』の世界の主役は、平氏・源氏、及びその麾下にある武士であり、また後白河法皇をはじめとする貴族、大寺院の僧侶・衆徒たちである。それぞれが、すでに掌握している権力の維持を図り、あるいはその打倒・転覆を策し、実権の伸張を目指してさまざまに行

動するその拮抗のダイナミックな展開が、物語の主要な場面を構成して進行し、この抗争の渦中において、登場人物はそれぞれの人間的資質や性格を顕著に表してゆく物語である。事件の中に生ききっている時、それらの人物をめぐる人間関係は、もっぱら私的な血縁関係を離れて、事件の当事者の間の緊張に叙述は集中する。しかし、いったん事が決着をみて、一方が敗残落魄の身となると、感傷的、詠嘆的表現でこれに同情が注がれると共に、その累が妻や子など、私的な家族の身の上に及んでゆく事が語られる。愛別離苦の境涯に置かれた親子・夫婦の悲嘆を、哀切をこめて語るこのような場面が訴えるものは、断ちがたい「恩愛」の絆である。『平家物語』はこの恩愛の苦悩を語る事によって哀傷感を一段と深めていく。その具体的な人物を平家一門並びにその近親に絞って検討したい。

### 1、維盛の恩情

まず清盛の孫維盛の場合を例にとってその哀傷の悲しみ、親子が故の切ない情愛をここで述べてみたいと思う。清盛の死後、平維盛（清盛の孫、重盛の息）は、東国の頼朝、北陸の木曾義仲追討の大將軍という大任を預かりながらも、惨敗を喫した。維盛はもともと武略に猛けた武人ではなく、『建礼門院右京大夫集』も「絵物語にいひたてたるやうに美しくみえし」（注6）という王朝的貴公子であったようで、『平家物語』にも、戦線を離脱して熊野に入った維盛を見知っていたある僧の言葉として、後白河法皇五十の賀の折、青梅波を舞った維盛の優美な姿が回想されている（巻三「公卿揃」）。平家の嫡流でありながら、最も貴族的性格を持った維盛が、一門の没落と滅亡への運命に遭遇した時、断ち難い執着をもって逡巡するのが恩愛の契であった。木曾義仲の進攻を前に、都を落ちてゆく平家一門の中で、維盛は別離を嘆き、後を慕う妻子の悲しみにひかれて一行に遅参する。妻子を都に残して落ちていくのは「道にも敵待なれば、心やすうとおらん事も有がたし」（巻七「維盛都落」）と言い、「行くすゑとてもたのもしうも候はず」（巻七「一門都落」）と言う、滅びの運命を察知した維盛の悲観的な見通しのゆえである。

一の谷の戦いに敗れ、屋島に退いた平家一門の中において、維盛は「ふるさとにとどめおき給ひし北方おさなき人々の面影のみ、身を立そひて、わするるひまもな」（巻十「横笛」）いありさまであった。こうして「あるにかひなき我身かな」（巻十「横笛」）と慨嘆して屋島を脱出し、「都へのぼって、恋しき人々をいま一度みもしみえばや」（同）と思ったが、かなえられる情勢ではない。維盛はついに高野山に登り、滝口入道に導かれて「堂々巡礼」し、出家を遂げたのである（巻十「高野巻」）。「流転三界中、恩愛不能断、棄恩人無為、真実報恩者」と三反唱えて髪を剃りながらも、「あはれ、かはらぬすがたを恋しき物どもに今

一度みえもし、見て後かくもならば、おもふ事あらじ」(巻十「維盛出家」と心の動揺を隠さず、物語の作者は「罪ふかけれ」とこれを評している。恩愛をめぐるこの心の葛藤を語る事によって、『平家物語』はただの悲壮で勇ましい合戦のエネルギーな世界の展開としての立場だけでなく、極限状況に置かれた人間内面を洞察する、奥行き深い作品となってくるのである。維盛は熊野参詣ののち、那智の沖で入水を遂げるが、その瞬間にも「あはれ人の身に妻子といふ物をばもつまじかりける物かな」(巻十「維盛入水」と述べざるを得ない。恩愛がそのまま妄執である不幸を、豊かな人間的至情のゆえに経験し、苦悩しなければならなかった維盛であった。

戦乱は生木を裂くように、相愛の男女に別離を強いるものであるが、維盛のほかにも、夫通盛を一の谷の合戦で失った小宰相の身投げは、恩愛の深さを語る一コマであり、宗盛・清盛親子の最後も、滝口入道と横笛の悲恋も、恩愛の葛藤を訴えたものであった。

## 2、宗盛親子の情

宗盛は最後の壇ノ浦で入水するのをためらっているところを味方の武士に突き落とされる。これを追って息子の清宗も飛び込むが、二人とも水泳がうまく、お互いに相手が沈んだら自分も死のうと浮きつ沈みつしているところを源氏に生け捕りにされる。こうしていったん鎌倉に護送され、その帰途近江の篠原にさしかかったところで処刑されることになる。いよいよ首の座に据えられると、しきりに念仏を唱えるが、刑の執行人が後ろに回ってあわや刀を振り下ろそうとした時、「右衛門督もすでにか」と叫んだ。同じく処刑される息子清宗のことを気遣ったのである。その直後白刃一閃して宗盛の首は前に落ちた。『平家物語』では、これをせっかく念仏を唱えていたのに、いまはのきわに息子への愛執断ち難く、妄念をこの世にとどめ、「いきての恥、しのんでの恥、いづれもおとらざりけり」(巻十「大臣殿被斬」と宗盛を不憫に思いながらも冷笑している。結局死に対するあきらめの悪さ、この世への未練がましさ、これが一種の醜として『平家物語』は否定的に表現しているが、死に臨む親子の情愛を誰が涙なくして傍観できるであろうか。

## 3、成親・成経親子の情愛

成親が鹿の谷事件で清盛に拘禁された後、成経も清盛の召還を受ける。成経の妻は平家の一門教盛の娘であり、教盛は舅・婿の情愛と娘の悲嘆を苦慮して成経の救済に奔走する。事件の波及から心労する教盛の心情も、また恩愛故の苦悩であった。「あはれ、人の子をばもつまじかりける物かな。我子の縁にむすばれざらむには、是ほど心をばくだかじ物を」(巻二「少将乞請」と慨嘆した教盛は、ひたすら父の身の上を案じ、父成親がいったんは



助命されていると聞いて喜ぶ成経の姿に、「子ならざる者は、誰か只今我身のうへをさしをひて、是ほどまでは悦べき。誠の契はおやこの中にぞありける。子をば人のもつべかりける物かな」(同)と維盛と同じようなせりふを發し、慨嘆する。そこには恩愛こそ「誠の契」であることを強調しているのである。成親はやがて流刑となり、配所で殺害される。その間の妻子の嘆きが切々と語られ、子息成経が建礼門院安德帝出産の大赦による鬼界が島流刑の放免は、帰還する途上で父の墓所を弔い「忘れ難きは撫育の昔の恩、夢の如く幻のごとし。尽きがたきは恋慕のいまの涙也」(巻三「少将都帰」)と述懐する。親子の情愛これに勝るものなし。これは『平家物語』の感動の一面を形成している所である。

以上平家一門に絞った親子・夫婦の情愛の悲しい一面を取り上げたのであるが、そもそも平安末期の院政期は、上皇を治天の君としていただき、実力をもって政治の断行を行う社会であった。これは武力によって事を決する中世武家社会を新たに招来する必然性をはらんでいた。そこへ移行を具現した源平の戦いの中には、激しく動く歴史を見据えた『平家物語』が生まれ、その時代を生きる新しい女性がいたことも確かで、そこにはおのずから女性の秘話が生まれてくる。例えば清盛の専横のために出家を遂げて往生した白拍子「祇王」(巻一「祇王」)が、心ならずも二条天皇の宣旨により近衛・二条の「二代后」とならざるを得なかった藤原多子(同「二代后」)、高倉天皇の恋を憚り受け止めかねて亡くなる「葵前」(巻六「葵前」)、悲しみの高倉天皇の心を慰めた宮中の美女小督が清盛の怒りを恐れて嵯峨野に身を隠す。琴の音を契機に再び宮中に戻ったものの、清盛に尼にされる(巻六「小督」)。また白河法皇(平安末期第72代天皇・院政の創始者)が忠盛に賜って清盛を生んだ「祇園女御」(巻六「祇園女御」)、夫通盛を打たれたとの報を受け、懷妊の身のまま念仏を称えて屋島の海に身を投じた「小宰相身投」(巻九「小宰相投身」)、生け捕りの重衡に直面しその死後出家した「内裏女房」民部卿入道親範の娘(巻十「内裏女房」)、鎌倉に送られる重衡を慰め、その死後は信濃国善光寺で出家往生したという手越の遊女「先手前」(巻十「先手前」)、自分との恋を捨てて出家した滝口入道を嵯峨に訪うも会う事を果たせず、出家してほどなく亡くなった雑仕女「横笛」(巻十「横笛」)、そして壇ノ浦での平家滅亡後出家し、大原を訪れた後白河法皇に六道輪廻を説き、平家の人々の後世を弔い往生を遂げた建礼門院(灌頂卷)といった人々がある。戦乱の裏には女性が泣いている。これらいずれも、己の意志ではいかんともなしがたい人物の権力、あるいは運命の流れの前に、その人生を苦しみ嘆き生きる事を余儀なくされた女性たちの物語である。そしてこれら十名の内七名の女性が、この世から出離を遂げている。かように『平家物語』では、軍記物

話の性格を帯びると共に、見事にこの戦乱の蔭に隠された女性悲話を描き、世人の涙を誘っている。ここでは紙幅の関係上、終章「灌頂巻」を取り上げ、清盛との対比において、建礼門院のその後を述べることで、女性悲話の締めくくりとする。

#### 4、建礼門院の六道輪廻と昇天

清盛が地獄に堕ちたのに対し、平家一門の中でも建礼門院（徳子）だけは確実に極楽往生を遂げた人として『平家物語』では述べている。女院が後白河法皇の訪問を受けた時（灌頂巻「大原御幸」）、法皇の訪問は思いも寄らぬことと語り出す。女院も法皇も涙。その涙ながらの物語に、女院は一門の菩提を祈りつつ、いまだに先帝の面影が忘れがたいと嘆く。そしてこれまでの半生を六道輪廻の境遇であったと述懐される。女院が六道輪廻を体験したというのは、平家の都落ち、屋島・壇ノ浦の戦い等の出来事が女院の半生でもあり、また平家の盛衰でもあった。すなわち④天上⑤人間⑥修羅⑦畜生⑧餓鬼⑨地獄の六道であり、語り終えた女院は「先帝聖霊、一門亡魂、成等正覚、頓証菩提」（灌頂巻「六道之沙汰」）を祈る女院をして、すでに天（聖）女（注7）と生きながらも転生させていると言う。言い換えれば、この六道描出は『平家物語』作者・唱導者たちの構想でもあろうか、絶好の話材でもあった。そして幾層にも語り伝えられて行くうちに、それが一層の重々しい荘厳な文体となり、さらには女院徳子の生涯を圧縮させることになって、物語全体を見通した「諸行無常」を具現する章にもなっている。この六道の片鱗を見ると、④天上：「清涼紫宸の床の上」、女御・国母として「長生不老の術をねがひ、蓬萊不死の薬を尋ても、ただ久からむ事をのみおもへり」（巻七「竹生嶋詣」）で秦の始皇帝と漢の武帝の故事を例に、当時の神仙思想、陰陽・五行説信仰等の道教に絡み合わせて、すでに蓬萊への去就も決まった事を指す。⑤人間：「人間の事は愛別離苦、怨憎会苦、共に我身にしられて侍らふ。四苦八苦一として残る所さぶらはず」（灌頂巻「六道之沙汰」）と一門の再会することの決してない別離、悲しみを描いている。⑥修羅：「くろがねをのべて身にまとひ、明ても暮てもいくさよばひのこゑたえざりし事、修羅の鬨諍、帝釈の諍も、かくやとこそおぼえさぶらひしか」（同）と、仏法を滅ぼそうとする帝釈・梵天との戦いを例にあげている。⑦畜生：「播磨国明石浦について、ちっとうちまどろみてさぶらひし夢」（同）に「龍宮城」で平氏一門の整然としたゆゆしい姿を見たという。龍の事はインドでは蛇の事を指し、すなわち龍宮城の夢に平家の軍勢を見たという事は、畜生道をかいま見た事をいっている。⑧餓鬼：「みつぎものもなかりしかば、供御を備ふる人もなし。たまたま供御はそなへむとすれども、水なければまいらず。大海にうかぶといへども、うしほなればのむ事もなし。是又餓鬼道

の苦とこそおばえさぶらひしか」(同)と、潮はあれど淡水のないことによる食物の欠乏、飢餓状態を想起させられる。確かに源氏に救われた建礼門院は一時京都東山の麓吉田にひっそくするが、絶えて訪らう人もなく、また火事で消失した後に入った寂光院もそれこそさびれた粗寺である。したがって門院の後半生は惨めなものであった。⑥地獄：壇ノ浦の戦いで先帝(安徳帝)は祖母二位の尼時子に抱かれて入水した。残された人々のありさま、「叫喚大叫喚のほのおの底の罪人も、これには過ぎしとこそおばえさぶらひしか」(同)とある。以上の話を聞かされた法皇は、異国の玄奘三蔵の例を挙げ、またわが朝の日藏上人は「蔵王権現の御力にて六道を見たりとこそうけ給はれ」と言葉を添え、天(聖)女と変転している女院を、「天人五衰」の例を示して慰める。以上が女院の六道輪廻であるが、女院にとっては死ぬに死に切れなかった事だろう。壇ノ浦に追いつめられ、一門入水のおりに建礼門院は母二位の尼時子から

昔より女はころさぬならひなれば、いかにしてもながらへて主上の後世をもとぶらひまいらせ、我等が後生をもたすけ給へ」(灌頂巻「六道之沙汰」)

と言われ、一人生き残った。夫高倉天皇はすでに崩じ、父清盛も病死、そして今日の前で母と実子安徳天皇をはじめ一族ことごとくが入水し、文字通り天涯の孤児となった。かつての皇妃・国母とはやされる極位からたちまち人間として最も不幸な境遇に落ちてしまう。大原の里に引き籠り、寂光院において亡者の追福を祈り、おのれの得脱を期しつつ信仰一色の質素な余生を送る門院には、やがてその悲劇的生涯を閉じる時が来る。阿弥陀仏の手に結んだ五色の糸の端を持ち、念仏を称えつつ静かに息を引き取ったという。その時「西に紫雲たなびき、異香室にみち、音楽空にきこ」えたという(灌頂巻「女院死去」)のは、門院の極楽往生を意味する結末である。

紫雲と異香と音楽とで極楽往生を暗示するやり方は極めて月並みで、しかもわざとらしい修辞法であるが、それだけにむしろ『平家物語』の作者には門院に何が何でも往生してもらいたいという願いが込められていた事を感じさせる。その数奇な運命に翻弄された門院に対する同情のほか、敬虔な尼として仏に仕えた、その善行に対する善果を言いたかったのであろう。特に冒頭で清盛の悪行を書き、それ故の悪因悪果に対して、物語の最後で門院の仏に仕える敬虔な善果に対する極楽往生を用意し、ここで言う善因善果のいわゆる仏道で言う所の修因感果を前面に出している。換言すれば、『平家物語』は人間社会を支える基本的な支柱として仏法と王法との二つを措定し、これを獲得しなければならないとする態度を最後まで貫いた事である。ここには修因感果、因果応報という理法を不可避の

ものとしてこれを容認している。清盛の国家権力を手中に収めて伝統的な王法を勝手気ままにもてあそび、その上仏法に対する最大の冒瀆にも敢えて臨み、そこには必然的に地獄に落ちるべき因果が待っていたと言う。これに対して門院は王法の内側に身を置き、ある意味で清盛の専横の犠牲者であった。加えて敬虔な求道の尼となり、平家一門の冥福を祈りながら余生を送る。これは仏法の理法にかなった生涯であった。これはこの両者の、親子でありながらかように対蹠的に臨終の場面が大きく異なった双方の対比である。又捕らわれの身となった重衡が最後に懺悔と念仏を行ったため、墮地獄の責め苦だけは免れた(巻十一「重衡被斬」)と『平家物語』は言っている。いずれにせよ『平家物語』が一番言いたかったのは因果応報であり、王法・仏法を基底とした处世観であった。

## 五、結び

『平家物語』を読む。それはいつまでも物の気配に聞き入ることから始まる。そして身じろぎして、おもむろに動き出すものであり、それについて耳に聞こえ始めるのは、胸の動悸と紛らわしいほどのひそかな音である。『平家物語』が語っている一切の歴史の流れは、とっくの昔、遠い昔の世に終わっているストーリーである。何かの始まる予感ではなく、また何かが終わる予感でもない。しかしそれでも胸のざわめきは感じられる。あることの始まりはあることの終わりでもある。そしてこの予感とは、また何かの始まりとは、まさしくこの世の「無常の姿」ではなかろうか。命を享けたものがすべてたどる一栄一落のありさま以外のなにものでもない。それが現在我々が古典として書かれた『平家物語』を読む時のあるべき姿勢ではなかろうか。作中には剣戟のひびき、人馬の土けむり、勝ちどきの声、はためく軍旗、更に心琴を震撼してやまない無情の嘆きや悲しみ、それは今に続いていることで、別に昔だから起こったことではない。したがってこの『平家物語』を読む際して、まず当時の世相を頭に描き、社会・国家のあり方を胸に描いてこれを正確に読むことが肝要である。本小論ではこれを純文学的に読むことではなく、又これを作者の意中のままに読むことでもない。「勝てば官軍」式の軍記物語は、すでに時代の推移によって少しづつ変形し、そのあるべき姿も変わってきている。『平家物語』で語られる清盛像は、何が何でも彼を悪者にし、そして仏法で説くいわゆる因果応報に当てはめようとする作者の意図は、それを加味しつつ解説したのが拙論である。清盛を「おごれるもの、猛けきもの」の頂点に置き、その罪業が地獄に落ちるべき命運を自ら作ったという物語は、果たして清盛だけのものであろうか。そしてその結果として源頼朝を正義の味方とし、朝廷に仕える

者、王法・仏法の擁護者として見る場合、それは妥当であろうかという疑問が残る。特に中世に書かれた物語には、それが『保元物語』『平治物語』『太平記』にしても、それらはその時代の思考形態や思潮を反映したものとして受け止めなければならない。『平家物語』が書かれた時代は、まさに戦乱の時期であり、また社会が大変動を来す前ぶれでもあった。そもそもその発端は、もともと源氏と共に天皇に仕える忠臣平清盛と平家一門が、王権を凌駕しかねないほどの権力を持ったが故の悪行を積み重ね、異端者の役割を担わされることになるのが『平家物語』であり、この作品についてもはや多くを語る必要もあるまい。物語では忠臣は源頼朝である。木曾義仲・源義経も清盛と同じように、忠臣の役割を演じた後、異者の役割をも演じさせられている。これら物語の構造は、「王権への反逆者の物語」が主題であり、それを構造化したのが軍記物語である。これら軍記物語を読み、聞くためには、物語が事件を強引に王権の危機へと捏造する過程を摘出して、王権の至高性を再三にわたって読者の頭に植えつけようとする意図を推し測るべきである。王権の至高性とは「神孫君臨」であり、それに付随する「神明擁護」である。天照大神の子孫が王位を継承し、それ故に、天照大神・八幡大菩薩を始めとする日本という国家共同体の超越者が王権を守るとというのが、王土の共同体の神聖な規則・ルールであり、神孫以外の者が王権を手にすることはそもそも論理的には不可能なのである。それはまさに、決して手の届くことのない隔絶した聖なる高みに存在し、唯一不二の王の血の絶対性に支えられているものである。『将門記』において将門が応仁天皇の蔭子として新皇を僭称するからこそ逆賊であり、彼の反逆の正当性の根拠は、彼が皇統に繋がっていることに存在する。この将門の主張は、彼の死によって、結果的に否定されることになるが、例え王家を出て人臣となったとしても、王の血を引いている者が新皇と称し、王土を領有することは不可能である。その点、清盛は自らを桓武天皇第五の皇子の後胤と名乗り、源為朝も清和の御末、為朝まで正しく九代と（『保元物語』）（注8）と誇らしげに語り、更にその後の北条氏、足利氏、織田氏、徳川氏もそれぞれ皇統を持ち出して自分の出自の至高性を強調している。『平治物語』で藤原光頼は、藤原信頼の所行に対して、「人臣の王位をうばふ事、漢朝にはその例ありといえども、本朝にはいまだ、如此の先規を聞かず」（注9）と嘆くが、王権の至高性は実は軍記物語の一貫した作風であり、国土の共同体の維持に貢献するものである事を無自覚のうちに教えたものとして理解する。無自覚ならば、我々は知らず知らずのうちに「物語」に共鳴し、加担する。王権の反逆者として、更に仏法への加害者として描かれる清盛像、更に平家一門の滅亡という結末に読者は終始する。しかし、ここで問題として取り上げるのは、

『平家物語』を単なる王法・仏法の叛逆者が故にほろんだと単純に読むのではなく、それを楽しく、更に意味深長に読み、その中に含まれている人間社会の抜けられないしがらみである諸行無常、人間関係の機微、更に親子・男女の愛情をくみ取る事が大切ではなからうかと思い、これを思いきって結びとするものである。

## 注

1. 大野順一著 『平家物語における死と運命』 創文者 1966年 85頁
2. 正木信一著 『「平家物語」―内から外から』(新日本新書) 新日本出版社 1996年 9頁
3. 渡辺貞磨著 『平家物語の思想』 法蔵館 1989年 35頁
4. 正木信一著 『平家物語―内から外から』 86頁
5. 市古貞次編 『平家物語諸説一覧』 明治書院 1970年 132頁
6. 山下宏明編 『平家物語 研究と批評』 有精堂 1966年 276頁
7. 水原 一著 『平家物語の形成』 加藤中堂館 昭和46年 318頁
8. 山下宏明編 『平家物語 研究と批評』 276頁
9. 上掲書 276頁

## 参考文献

- 大原富枝著 『大原富枝の平家物語』 集英社 1996年
- 大野順一著 『平家物語における死と運命』 創文社 1966年
- 山下宏明著 『平家物語研究序説』 明治書院 1972年
- 山下宏明編 『平家物語の世界』 大阪書籍 1985年(朝日カルチャーVブック)
- 山田昭全著 『平家物語の人々』 新人物往来社 1972年
- 山下宏明校注 校注古典叢書『平家物語』 明治書院 昭和50年
- 山下宏明編 『平家物語 研究と批評』 有精堂 1996年
- 小池義人著 『滅びの美「敦盛」:須磨・一ノ谷・須磨寺』 須磨社 1985年
- 上横手雅敬著 『平家物語の虚構と真実』 塙書房 1999年
- 日本文学研究資料刊行会編 『平家物語』解説 日本文学研究資料叢書 有精堂 昭和44年
- 市古貞次校注・訳 日本古典文学全集『平家物語』 小学館 昭和48年

- 市古貞次編 『平家物語：諸説一覧』 明治書院 1970 年
- 市古貞次郎著 『平家物語必携』 学燈社 昭和 42 年
- 正木信一著 『「平家物語」内から外から』 新日本出版社 1996 年
- 村井康彦著 『平家物語の世界』 徳間書店 昭和 48 年
- 佐藤謙三校注 『平家物語』文庫二冊 角川書店 昭和 34 年
- 兵藤祐己著 『平家物語—〈語り〉のテキスト』 筑摩書房 1998 年
- 西田直敏著 『平家物語の文体論的研究』 明治書院 1978 年
- 西岡常博著 「『平家物語』を生きた人々」 近代文芸社 1995 年
- 谷宏著 『平家物語』古典とその時代 4 三一書房 1957 年
- 角田文衛著 『平家後抄』 朝日新聞社 昭和 53 年
- 高橋貞一校注 『平家物語』文庫二冊 講談社 昭和 47 年
- 高木市之助・小沢正夫・渥美かをる・金田一春彦校注 日本古典文学大系『平家物語』  
岩波書店 昭和 43 年
- 高木市之助・永積安明・市古貞次・渥美かをる編 『平家物語』(国語国文学研究史大成九、三省堂、昭和 35 年。増補版、昭和 52 年)
- 長野嘗一著 『平家物語の鑑賞と批評』 明治書院 1975 年
- 砂川博著 『平家物語新考』 東京美術 1982 年
- 清瀬良一著 『天草版平家物語の基礎的研究』 溪水社 1982 年
- 富倉徳次郎編 『平家物語：変革期の人間群像』 日本放送出版協会 1972 年  
(NHK ブックス ; 151)
- 富倉徳次郎編 『平家物語』(鑑賞日本古典文学一九、角川書店、昭和 50 年)
- 渥美かをる著 『平家物語の基礎的研究』 笠間書院 1978 (笠間叢書 ; 95)
- 渡辺貞磨著 『平家物語の思想』 法蔵館 1989 年
- 堀竹忠晃著 『平家物語論序説』 桜楓社 1972 年
- 落合重信他著 『平家物語散歩；京都・一ノ谷・屋島・壇ノ浦』 創元社 1972 年
- 橋本義彦著 『平安貴族社会の研究』 吉川弘文館 昭和 51 年
- 梶原正昭著 「『平家物語』の一考察」—“史かの谷”と白山事件」 「早稲田大学教育学部学術研究」一〇、昭和 36 年 11 月
- 富倉徳次郎校註 日本古典全書『平家物語』 朝日新聞社 昭和 23 年
- 野村宗朔校注 昭和校訂『平家物語』 武蔵野書院 昭和 23 年